

埼玉平成高等学校 講演

テーマ「心に届く言葉～日本語を味わい尽くそう～」

講師：文筆家 豊田美加氏



「言葉は感性を磨く。感性を磨いて勤や閃きを生むシャープな脳を青年期に育てたい」。言葉に強い生徒を育てるという信念のもと、日々の指導の中に「言葉の時間」を設けている埼玉平成高等学校。全生徒が日本語検定に取り組む学習を行い、年に一度の「言葉の教育」の講演会も定着している。今年では中学生を加えた千百名が受講。講師は、自身の体験を交えながら日本語をさまざまな切り口で語り尽くす、文筆家の豊田美加氏。

豊富な語彙を身につけたら 選び取る術を磨く

私の肩書きは文筆家です。オリジナルも書きますが、多くはドラマや映画、漫画を小説化した「ノベライズ小説」と言われるジャンルに携わっています。ドラマや映画には脚本（台本）があり、台詞（セリフ）とト書き（俳優の動作の簡易指示書き）で構成されますから、ト書きのイメージを膨らませて読者の五感に響くストーリーを創り上げるのが私の仕事です。いわば、脚本に肉付けをする「文章職人」。脚本は、歴史もの、青春アニメ、ラブストーリーなど多種多様、作品ごとに最適な文章と言葉を選び抜かなければなりません。実は、これが最も難しいのです。たとえば、「イケメン」。現代作品にはよく使う言葉ですが、大河ドラマとなれば「男翌郎」、「端正な顔立ち」、「一枚目」の方が時代背景にふさわしいのです。こうした仕事をすることで、常々、日本語の語彙の深さを痛感します。

面白いデータがあるのでご紹介しましょう。日本語を90%理解するために必要な語彙数は一万語だそうです。対して英語は三千語、さらに、フランス語やスペイン語は二千語。他国に比べ、日本人に備わる圧倒的な言葉の数に驚かされますよね。みなさんの頭の中にも、既に一万語以上の語彙がインプットされています。

ということですが、しかし、どれだけ多くの語彙を持っていたとしても、選び方を間違えれば自分の真意を相手に伝えることはできません。大事なのは言葉の選び方です。

言葉は感性を磨き 感性は言葉を磨く

ドラマや映画には、登場人物の喜怒哀楽を表現するシーンが数多くあります。たとえば、「笑う」。ひとくちに笑うと言っても、笑い方や笑ったときの感情はシーンごとにすべて異なります。丁寧に書き分けることを求められますが、ありがたことに、日本語には豊富な同義語があります。さて、「笑う」の同義語、どのくらい思い浮かびますか。

「笑う」、「微笑む」、「苦笑する」、「腹を抱えて笑う」、「吹き出す」、「ほくそ笑む」、「含み笑いの」、「嘲笑する」、「冷笑する」、「薄笑いの」、「破顔する」、「一閃する」、「頬を緩める」、「顔をほころばせる」、「作り笑いの」、「グスマスマ笑う」、「へらへら笑う」……。一つの動作にも無数の表現があります。いずれも、「笑う」ですが、ニュアンスが違います。この同義語の使い分けができるようになれば文章力も上達します。

埼玉平成高校のスローガン「言葉は感性を磨く」。言葉を磨けば感性も磨かれ、

豊かな感性からは多彩な言葉が生まれる。私も言葉と感性は一体だと感じています。たとえば、複合動詞「咲き乱れる」。意味の違う「咲く」と「乱れる」という二つの動詞が重なった言葉ですが、外国人には理解するのが難しいそうです。日本人なら「咲き乱れる」と聞いた瞬間、一面に競うように咲く花々を思い浮かべますよね。幼い頃から接している言葉だからこそ感覚で理解できるのでしょうか。

日本人として 恥じない日本語を

話は変わりますが、昨年、一昨年と、台湾に関する本を執筆し、初めて台湾を訪れました。終戦まで台湾は日本が統治していましたから、終戦時に10才前後だった80才前後から上の方は今でも日本語が話せます。このご老人方は、日本語教育を受けた日本語世代と呼ばれ、今でも古き良き時代の日本語をお話しになります。それはもう、日本人よりずっと美しい日本語を。昨今の言葉の乱れ、日本語を母語にもつ私たちが、他国の方より低いレベルの日本語で話しているのは、恥ずかしいと痛切に思いました。また、台湾では日本のドラマやアニメの人気も高く、高校生や大学生を中心に日本語を学ぶ多くの若者の姿を目にします。友人になった台湾の若者に、日本語の良さと難しさを聞いてみました。

次ページへ



まず、早稲田大学に留学中の三年生女性。

「良いところは音声が優美なところ。日本語を話す時は他の言語と比べて口を大きく開かないので、礼儀正しくおとなしい感じがします。良くも難しくもあるのが、場面ごとに言葉遣いが変わることです。どんな場面で、どんな敬語を使うのかが一番難しい。日本語の良いところは丁寧さかな。単語の前に“お”や“ご”をつけて丁寧な感じになるのは、中国語や英語にもない素晴らしい所だと思います。言葉に対する意識、日本人の繊細さを感じます。個人的には擬態語の多さが面白い。勉強すればするほど日本語はどんどん面白くなっていきます」

彼女はまた数年しか日本語を勉強していないのですが、これぐらいの文章を書きます。

もう一人は台湾の大学に通う男子学生。日本語の達者な台湾の大学生から見た日本語についてご意見伺えますか、と聞いたところ……。

「身に余るお言葉です。愚見を申し上げますと、良いところは敬語、難しいところは日本語の文法の変化や漢字の読み方が多すぎるところです。敬語は、人への気配りや礼儀正しさを感じます。社会生活において重要だと思っております」

彼は、高校三年生から日本語の勉強を

始めたそうです。台湾で日本語能力検定一級を取得し、国家試験の通訳ガイドもパス、学生ながら通訳の仕事でも活躍しています。日本語を学び始めたのは、高校二年生の時に留学したアメリカでの出来事があったかけ。先生を呼び捨てにする英語に馴染めず、〇〇先生と“先生”をつける日本人の礼儀正しさに好感を持ち、日本語を勉強したいと思ったそうです。その後、独学で勉強を続け、今では敬語も完璧。日本語では難しいと言われる助詞の使い方や副詞の使い方も見事です。



二人とも、日本語の敬語が素晴らしいと褒めてくれましたが、敬語は日本人の感性の表れ。おもてなしの心や気遣いの一部です。みなさんも敬語は苦手かもしれません。敬語を磨けば自ずと精神も磨かれると思います。

手紙と俳句に学ぶ

美しい日本語の表現

日本語の美しさという面では、四季の移り変わりが日本人の繊細な感性を高めていると思います。みなさんは手紙を書くことなどあまり無いかもしれませんが、手紙と俳句には日本語の素晴らしさがギッシリ詰まっています。機会があればトライしてみてください。

手紙は、「拝啓」で始まり、季節に触れる時候の挨拶、安否の気遣いと続き、相手の健康や幸せを祈る気持ちで結び、最後まで思いやりの心を伝えます。堅苦しくもありますが、素晴らしい日本の伝統形式。時候の挨拶も結びの文も素晴らしい言葉が多いので、一度調べてみてはいかがでしょうか。日本語検定の試験に出題されることもあるはずですよ。

そして、俳句。俳句の代名詞と言え、松尾芭蕉の「古池や 蛙飛びこむ 水の音」、正岡子規の「柿くへば 鐘が鳴るなり 法隆寺」。しかし、外国の方が聞い

ても、頭の中はちんぷんかんぷん。古池に蛙が飛び込む音って？ 柿を食べてお寺で鐘が鳴ったからどうしたの？ まるで理解できないでしょう。みなさんなら、俳句を知らなくてもなんとなく体感、匂い、味、情景が浮かびますよね。俳句で重要な季語は、まさに日本人の豊かな感性そのものです。

季節によって変化する季語もあります。たとえば、山。春“山笑う”。草木が芽吹き始めた華やかさ。夏“山滴る”。緑が濃くなり生い茂る様。秋“山粧う”。紅葉の彩りを化粧にたとえて。冬“山眠る”。枯れた草木が深い眠りにつくかのごとし。こうした感性は、四季のある国に育った私たちの特権です。みなさんにも学んでいただきたいところですが、手紙や俳句よりツイッターやフェイスブックの方が身近かもしれませんね。

ツイッターは一四〇文字。長い文章を書く身からすれば、一四〇文字で相手に何かを伝えるのはとても難しいのですが、私自身ツイッターで心を動かされた文章もあります。短い文章で身近なことを誰かに伝えようと思えば、文章を磨かなければ伝わりません。スマホの使いすぎは控えた上で、文章の精度を上げるために利用する気持ちで使うなら、個人的には賛成です。

次ページへ



SNSは文章を磨く道具にも 相手を傷つける刃にも

正しい日本語こそ一生の武器。TPOに合わせて「話す」、「書く」ができるということは強力な武器になります。ただし、言葉は人の心に届かないと意味がありません。私の仕事も言葉が読者に届かなければ書いてる意味がないのです。いつも念頭に相手を思い浮かべ、どういう風に書いたら相手に解ってもらえるか、正しく伝わるか、を考えて書いています。同時に、正しい日本語で表現することも。

現代は、省略語、ネットスラング、オタク用語など、いろんな言葉があります。言葉は本来自由なので、「生まれ、使われて、消滅する」言葉があっても良いと思っています。ただし、それらを使う場合は、正しい日本語が使えるという根っこがなければダメです。私も文章を崩して書いたりしますが、最初から崩れていては崩しようがない。若者言葉を使うにしても、元々の正しい日本語は心に留めておきましょう。

また、SNSは、発信した言葉で、作家さんやモデルさんと簡単に繋がりをもてる世界です。ただし、繋がれるかどうかは礼儀として送る最初のメッセージ次第。いかに相手の心を掴むメッセージが

書けるか、語彙力や文章力にかかってきます。みなさんがこれから社会人として働く上でも、正しい日本語の文章で相手に自分の真意を伝えられなければ、読まれません、見下されることさえあります。ですから、正しい日本語はできるだけ高校生の間に身につけておきましょう。

かく言う私も勉強は得意ではなかったし、特に理系は全滅。ところが、勉強しないうちに、現国、古文、漢文は合格点でした。その理由は、読書。小学生の頃からかなりの本を読んできました。読書だけで国語の成績も大学受験も大丈夫だった、といっても過言ではありません。ですから、本を読む、美しい文章に触れることを強くおすすめしたい。声に出して読む「素読^{そどく}」は、意味が解らなくても音が耳に入ることによって言葉を習得でき、文章のリズムも身に付きます。

「コミュニケーションのツールとして使われるSNSですが、一方で危険な媒体であることも認識しましょう。フェイスブックの友達申請は、確か最大五千人でしたでしょうか。実はこの数、初版本の製造数と同じです。拡散して広がることを考えれば、新刊以上に影響力があります。下手なことは書けませんよね。誰に向けて書くのか、五千人の目に触れて良い内容か。発信する前に必ず再確認することを徹底していただきたいのです。

身に付いた言葉は 錆びない 衰えない

最後に、慣用語と四文字熟語をマスターすれば、表現力がグンと上がり、文章の質も格段に良くなります。最終的には、文章に自分の色や匂いを付けて、この文章は〇〇ちゃんのだ」と言われるようになる。書いた人の個性が際立つ文章が書けるようになれば、プロの作家になります。

表現力を鍛えるために私が行っている方法が、風景、人、見たもの、感じたこと、聞いたこと、匂い、味わいなどの五感で感じたことを文章にすることです。お題を決めて、お友達同士でやってみてはいかがでしょうか。個々の考え方や感じ方が違って、意外な発見があるはず。また、漫画の1ページの文章化もよくやります。これも面白いですよ。文章は遊びながら鍛えることもできます。

容姿はいずれ老いますが、言葉は錆びないし衰えない。年を重ねるほど磨かれていきます。言葉は一生かけて遊び尽くせる楽しい道具だと思って、みなさん味わい尽くして下さい。

